

## 森林吸収源インベントリ情報整備事業ブロック別講習会 西日本（九州）

開催日：2013年7月31日

場所：熊本県球磨郡多良木町（調査地点コード 430310）

講師：金子・志知（森林総研本所）、石塚・稲垣・釣田（森林総研九州支所）

### 概要

西日本の九州地域を主に担当する熊本県森林組合連合会（以下、県森連）の担当者6名を対象に地域講習会を実施した。当日は晴れで、調査地が高標高のため平地より涼しく比較的快適に作業が行われた。

今回カテゴリ A の調査をする地点は標高 1000m 付近のヒノキ人工林斜面（傾斜 30～35 度程度）にあり、道路から下って数分で容易に到着した。県森連は昨年度に続いての九州担当ということで、今回の講習会では主体的に調査をしてもらい、講師が必要に応じて助言する方針とした。そこで午前は概況調査後に3箇所の堆積有機物量・土壤炭素蓄積量調査を同時並行で行う、午後は残り1箇所の調査と枯死木調査を行うこととし、9時から調査を開始した。

3箇所並行して行われた午前の調査では、全体講習会に参加していない現場スタッフ3名が試料採取に関わる作業（穴掘り・整形・試料採取）を主に担当し、全体講習会に参加された現場責任者の2名が報告書に関わる作業（野帳記載・写真撮影）を主に担当していた。調査地点は堆積有機物量が比較的少なく、土壤が柔らかくレキも少なかった（0-2%）ので作業は手際よく進んだ。表層・2層目の土壤・円筒採取も傾斜に沿って行われ適切であった。各地点1～2層目の土壤採取を終えた時点で正午となり昼食をとった。

午後は午前の残りを仕上げた後、残り1地点の堆積有機物量・土壤炭素蓄積量調査と枯死木調査を並行して行った。時間的余裕もあったのでそれぞれ時間をかけて行い、3時半に現場調査を終了した。車に戻って最終試料確認を行い、全体総括後16時に解散した。

今回の講習会で気づいた点として以下の2つを挙げる。1点目は5mm以下の枝の分類である。本地点では1～3mm径の細いヒノキ枝が大勢を占めていた。これらは0.5cm以下であるのでTに該当しないが、方法書のQ&Aには「0.5cmは目安であって多少細かい枝がTに混入してもよい」と書かれており、現場スタッフはTとして採取していた。これについては、どう採取するのが最善かを改めて明示する必要性を感じた。2点目は円筒試料の採取方法がやや荒い事である。現場スタッフの方の多くはナイフ主体で円筒採取を行い剪定バサミは多用しない。根が多い場合でもナイフを円筒ギリギリに沿わせてザクザク刺して円筒を押し込むので、円筒周囲の根が暴れ土壤が崩れ本来の自然状態の容積重と違ってくる。これは正確な土壤炭素量の算出にとって致命的である。円筒の採取方法については、全体講習会に参加された2名は正しい方法が習得しているので、その技術を早急に現場スタッフに伝える必要がある。また現場で使用する剪定バサミの切れ味が悪いこともナイフ

主体となる一因となっている。円筒試料を採取する上での剪定バサミの重要性をその手入れも含めて再度周知する必要を感じた。



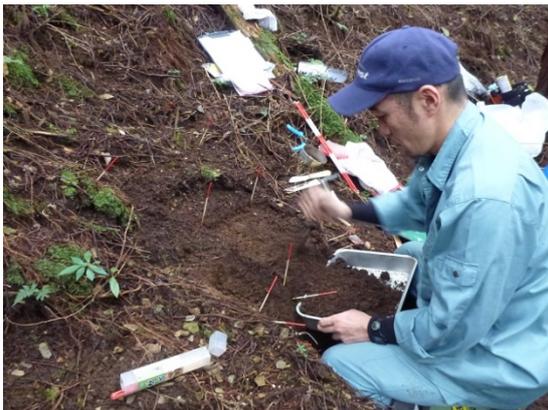
調査の様子。急傾斜のヒノキ林で手際よく作業を進める県森連のスタッフとそれを見つめる講師陣。



土壌断面の様子。土壌は柔らかくレキは少ない。地表にはヒノキの枝が主に堆積している。



リター採取の様子。「手でつまんで丁寧に」と実演する金子領域長。50cm 枠や串に工夫が見られる。



表層の化学性試料採取の様子。奥から手前に向けて深さ 5cm までの土を丁寧に採取している。



枯死木調査時に遭遇したマムシ。調査は常に危険と隣り合わせである。



調査後の総括。「くれぐれも怪我のないように」との金子領域長の話を聞く県森連の方々。